



## 書記言語・音声言語

古典入門の話の中で、漢字に関するトリビアを採り上げたり、歴史的仮名遣いのお話をしたりした。昨今は（…って、もう峠は過ぎたかも知れないが）漢字ブームといった現象もあったし、みんなの中にも漢検2級（準1級？1級？）などを取得している人もいるだろう。

さて、この漢字、日本語表記の「要」であるが故に、議論の対象となることも多い。

例えば、前日本語学会会長の野村雅昭先生（早稲田大名誉教授）などは、漢字の使用を増やしすぎると、日本語が亡びてしまう可能性だってあるという立場だし、逆に、私の好きな作家井上ひさし氏などは、漢字使用に制限を設けることには反対（振り仮名の効果的使用を主張）の立場だったように思う。井上氏は文学者でもあり、書き言葉で豊かな表現を追求しようとする立場にあるわけだから、言葉の使用に制限が設けられることには基本的に反対なのだろう。

で、君たちはどう思う？ 制限派の野村先生は、「国立国語研究所の調査では、小学校から高校までの12年間で、現在の常用漢字1945字のうち、読めるようになるのは8割、書けるのは6割程度です。漢字ブームといいますが、12年間の学校教育でも覚えきれず、生涯をかけて学び続けなければならない文字や表記体系が存在するのは異常ではないでしょうか」（\*）と言っておられる。

いや、現在はパソコンの時代だから、書けなくても「打てれば」いいわけだし、それなら読めさえすれば何とかできるのではないか、

という立場もあるだろう。これに対しては、「書けなくてもいいとなれば、その漢字の持つ意味が顧みられなくなります。それに、振り仮名をつけて難しい漢字をどんどん使えるとなれば、書くのはエリートで、大衆は読めればいい、となりかねない。文字は万民が共有すべきなのに、話し言葉と書き言葉との距離が増し、コミュニケーションが阻害されます」と野村先生は反論する。

さらに、「視覚障害や読み書き障害のある人にとって漢字は非常に不便です。画数が多く複雑な漢字は、機械で読み取ることが難しく、文字を拡大しても弱視者には負担です。

（中略）もはや日本語は日本人だけのものではありません。インドネシアやフィリピンから介護福祉士や看護師の候補者が来日しましたが、漢字が障壁となり、実務や国家試験に苦労している。今後、日本にやって来る外国人はますます増えるでしょう。ネットの発達で英語が帝国主義的な力を持つなか、日本語が生き残るには、外国人が学び、使いやすいように、漢字を減らす必要があります。」とも主張しておられる。

\*

歴史的仮名遣いのお話で、奈良時代に60音を区別していた日本人が、現在では45音しか区別していないという話をした。漢字に代表される「書記言語」の優勢がもたらした「退化（いや進化？）」だろう。漢字問題を考える際には、話す・聞くといった「音声言語」を豊かにする努力も必要なのかも知れない。